イノセンスの重荷

――『ゆたかに世界と時あらば』をめぐって――

香ノ木　隆　臣

アンドリュー・マーヴェルの「内気な恋人に」の一節をタイトルに引用した，ロバート・ペン・ウォーレン（Robert Penn Warren；1905–89）の第4作目にあたる長篇小説『ゆたかに世界と時あらば――あるロマンティックな小説』（*World Enough and Time: A Romantic Novel*, 1950）（以下，『世界と時』と略記）は，かつてエドガー・アラン・ポウやウィリアム・ギルモア・シムズらが著作の題材に求めたこともあった「ケンタッキーの悲劇」を下敷きにしている(1)。この事件は，1825年にケンタッキー州フランクフォートで，ジェレボーム・ビーチャムという若者が，年長の知人ソロモン・シャープ大佐にアン・クックなる女性を誘惑した末に捨てたという過去のあったことを知り，義憤に駆られて大佐を殺害し，自身は死刑に処せられたという実話である(2)。ジェレボームは獄中で『ジェレボーム・O・ビーチャムの告白』という手記を著した。1944年から一年間，米国議会図書館の詩部門の顧問を務めていたウォーレンはキャサリン・アン・ポーターからこの手記を手渡され，それが執筆の直接の契機となったというエピソードがある(3)。「公的な文人としてのウォーレンの遍歴は，アメリカの政治的文化の変遷に類似する様相を呈した」(4)と評されるほど，アメリカ社会に対するウォーレンの関心には尋常ならざるものがある。史実を文学作品の題材とすることでアメリカ的情況をあぶりだすウォーレンの特異な才能は，19世紀初頭の南部における「ケンタッキーの悲劇」のなかに，現代アメリカに通じるいかなる意義を発見したのかをここで考察することにしたい。

この小説では，主人公の名がジェレマイア・ボーモントに変更されている。ジェレマイアとはヘブライの預言者エレミア，もしくはエレミア書への言及であり，堕落した世界を嘆きつつ新たな秩序の形成をめざす主人公の姿勢を物語る。また，ボーモントとはフランス語で「美しい山」を意味し，この名の背後にアメリカ的なパストラリズムを読み込んでもよいだろう(5)。アメリカ的思考には「アメリカのエレミアの嘆き」(6)が存在し，その支柱となっていたのは地理的フロンティアの存在であった。主人公の名はこの連関を暗示して，彼はひとりの典型的アメリカ人となっていると考えられる。また，エピグラフとしてエドマンド・スペンサーの『妖精の女王』の第5巻序歌の抜粋が付されていることから，過去の美徳と現在の堕落が対比され，正義の騎士アーティガルの役がジェレマイアに与えられていることが読者に知らされている(7)。

冒頭の語り手の説明には，19世紀初頭のジェレマイアの物語を20世紀半ばの現代において掘り起こそうとするウォーレンの態度が表明されている。

> 私は遺されているものをお見せすることができる。自尊心，情熱，苦痛，抽象的な野望のあとに遺されたものが我々の手許にある。百年以上も前の新聞の抜粋はしみができたり黄ばんだりして，図書館に集められている。それはまるで，11月の木の葉が風に吹かれて落ちて，馬小屋の裏や空き地のフェンスの隅で湿ってぐちゃぐちゃになっているようなものである。日記，記録，手紙も黄色くなっていて，きちんと紐でとめてあるが硬くなってもろいので，触ると耐えられずに切れてしまうだろう(8)。

こうした資料を用いる語り手の手法は歴史家のそれにほかならない(9)。ジェレマイアの生涯を様々な資料に基づいて「私的な物語」に変える歴史家としての語り手（すなわち伝記作家）の作業は，「過去の事実や事件の単なる記録から象徴的な意味や構造を持った物語を構築すること」(10)そのものである。さらに，ウォーレンは『世界と時』について，「社会の緊張の相似物は個人の世界に存在する。個人は外的情況を体現するものだから，私的な物語は社会の物語となる」(11)と述べたり，別の機会に「歴史的感覚と詩的感覚は結局のところ矛

盾してはならない」(12)と記したりしている。つまり，ジェレマイア個人の物語の象徴性を公的なレヴェルにまで拡大しようとするウォーレンの戦略が窺えるということができるのである。

1801年にケンタッキー州の辺境に生まれたジェレマイアは，少年期に『天路歴程』，『フランクリン自伝』，数多くの西部探険記などを愛読する。これらの書物は『世界と時』のストーリーの展開を暗示するが，なかでも彼の心をとらえたのはジョン・フォックスの著作と推察される挿絵入りの殉教者の解説書であった。「若い女性が無残にも柱に縛りつけられ，『結び目が美しい肉体に食い込み，周りに炎が燃えさかるなかで，その顔は天に向けられている絵』」(10) を見つめる彼は，この女性を焚刑の場から連れ出してふたりで逃げたり，自分も炎のなかに身を投じたり，自ら最初に火を点けたりしたくなるといった性的夢想に耽る。この情景はやがて出会う女性レイチェルとの関係のありかたを予告し，さらには，自分を殉教者と同一視しようとする極端な理想主義，つまり「現実世界と理想の乖離」(13)がジェレマイアの心性を特徴づけることを物語っている。

ジェレマイアの内なる乖離を表すエピソードとして，彼の初めての性体験を挙げることもできる。15，6歳の夏，牧師の説教を聴いていた彼は突然に荒々しい歓喜の念に駆られ，無我夢中で叫びながら森のなかへ走ってゆく。そこで偶然に出会った「乱杭歯の醜い女」と関係をもったのだが，先の熱狂が冷めれば「けがれと裏切りという恐怖」(31) だけが残り，渓流の深みに息を止めて何度も潜って浄化を図るのであった。性体験という一種の儀礼を通しての成熟を拒否しているのは，イノセンスに固執する彼の理想がいかに強いかを表すものである。こうした彼の一方的な女性観は何を意味しているのであろうか。

ジェレマイアの人生の転機になったのは，名士カシアス・フォート大佐との出会いである。かつて連邦議会議員であったころ，彼はトマス・ジェファスンに「賢く敬虔である」(34) と称えられたという記述があり，ここからフォートは建国の父祖の属性を有していると判断できる。フォートの紹介で法律事務所に勤め始めたジェレマイアは市民と国家の関係についてのフォートの教えを

日記に書き留めているが，それは共和主義的なものであることがわかる。

> フォート大佐は政治や治国策の世界にも彼［ジェレマイア］を開眼させた。「彼［フォート］が言うことによれば，国家の健康状態は市民の幸福の尺度である。もし国家が病んでいればその病はあらゆる市民を侵すからである。そしていかなる知性や能力をもっていても，市民は十分の一税かそれ以上を公共善のために支払わなければならないのだ。」(43)

この引用には公徳と私徳の有機的な結合がみられ，それは共和国の永続のために不可欠の要素であった(14)。『フランクリン自伝』を愛読していたジェレマイアがこうした美徳の意義を学ばなかったはずがない(15)。

しかし，ジェレマイアの美徳，あるいは理想主義は，必ずしもよい方向へ向かったわけではなかった。親友ウィルキー・バロンから彼は，かつてレイチェルがその亡き父の管財人をしていたフォートの子を死産していた過去を聞き知る。「自分にとって父のようだったフォート大佐が，・・・信じていたような人ではなかったことを知った苦痛」(57) は激しい義憤に変わった。すぐさまフォートに絶縁を宣告した彼の心情を，「ジェレマイアは己れ自身という深遠なる真実を信じる必要があるだけだった。奥深くの内なる声に耳を傾けるなら，人生とはどれほど単純なものとなるだろうか！」(63) といささか皮肉な口調で語り手は説明している。過去のおそらくは複雑な事情を当事者に問いただすこともせず，ただ自分の義侠心のみに照らして問題を単純化するのは，ひとえに彼の理想主義ゆえである。今後の彼の行動は，ウィリアム・ベドフォード・クラークの評言では「混沌から秩序をつくりだす神のごとき作業」(16)に変貌するのである。

レイチェル・ジョーダンは父の死後，年老いた母と使用人とで静かに暮らしている。ジェレマイアはフォートへの復讐の決意を報告するために彼女の家を訪れるが，しばらくは面会を拒まれる。ようやく偶然にレイチェルと初めて面と向かったジェレマイアは彼女の容姿に魅せられ，手記に長々とそのときの情景を書き綴っている。なかでも注目に値するのは，「左の頬の頬骨のところ

に，しみのような色のあざがあった。親指の爪かそれより少し小さく，傷などではなくて誰もがくちびるをよせるようなしるしで，心臓に近いほうの頬で彼女の血の秘められた情熱と成熟を物語るかのようだ」(67) という描写である。このあざは，明らかにナサニエル・ホーソンの短篇「あざ」を意識した設定となっている(17)。「あざ」におけるジョージアナの左頬のあざが人間の不完全性や原罪というべきものの象徴であり，あざを取り除こうとするエイルマーが最終的にジョージアナを死に至らしめるのは，アメリカ的理想主義者の失敗を意味していた(18)。ジェレマイアはレイチェルのあざを取り除こうとは考えないとはいえ，それに対して彼は次第に強い違和感をおぼえるようになる。先に紹介した性体験の挿話ともあいまって，ジェレマイアのイノセンスへのこだわりが強調されているのである。

ジェレマイアが多分に理想主義的傾向をもっていることは，プラトンの『国家』や『饗宴』についてレイチェルと熱心に話し合っていることからも推測できるが，レイチェルに求婚する際の台詞にもよくその特徴がうかがわれる。

> 「愛ですって，」彼女は悲痛な調子で言った。「愛というのはどういうものか，どうしてわかるのです。」
>
> 「僕は知っている，」彼は言い放った。「男がそのためなら何でもするもののことだよ。そして僕は——」
>
> 「もう遅すぎる——遅すぎるの。世界はすべて堕落しているから。」彼女は言った。
>
> 彼女の手をもっと強く握り彼女のほうに身を寄せて，彼は早口の低い声でこう言うのだった。「ひとつの世界が堕落しているのなら，僕らが違う世界をつくればいい。わかるかい，別の世界をつくるためには今のを捨ててしまわなくては。引き抜いて捨ててしまおう。粉々にしてしまおう。壊してしまおう。それでいいよね。」彼はもっと近づいて彼女の目を見つめていた。「なぜなら，正義がなければならないから。あなたはもう充分に苦しんだから正義がなければならないんだ。正義があれば苦しむことはないし，僕は何でもするよ……」(113)

「内気な恋人に」においては，「ロマンチックな膨張を続けた時・空」[19]のなかで愛し合うことを詩人のペルソナは諄々と説きつつも，その奥底にはクロノスの支配する現実に対して，絶望に近い認識が横たわっていた。一方，この引用では劇的な口調と息づまるような激しい熱情にもかかわらず，ジェレマイアの未熟さやオプティミズムが露呈されているといわなければならない。レイチェルは家庭の零落，フォートとの恋愛の破局，それらにまつわる世間の好奇の目にさらされるといった体験を経た女性であり，左頬のあざに象徴されるように，悲しみを経験して再生した女性である[20]。「あなたはとても愚かで夢ばかりみている男の子なの。本ばかり読んでいて世の中のことを何も知らないのよ」（73）という忠告を聞き入れないで，進んで復讐者の役を引き受けようとするジェレマイアを，彼女は拒絶していた。「フォートを殺して！」（114）とレイチェルは結婚の条件をジェレマイアに提示しているが，本心からそう言ったのではなく，何とかジェレマイアを思いとどまらせるために無理難題を与えたと解釈する方が妥当である。

「この世界のどんなゆたかさでも満たすことのできない自分のむなしさから，彼は自分のゆたかさとなるような何かを生み出さなければならなかった」（115）とは語り手の解説である。ジェレマイアの肥大した自我意識は，レイチェルの愛ではなく自己そのものが目的であり，彼の行動は自己探求の悪しき一変種にほかならないのである。フォート殺害を思い描くときに「『私は時の外で生きているような気がしてきた。自分のなかの考えのほかに現実的なものは自分にはなかった』」（137）と感じたことを告白しているのはその証拠である。ジェイムズ・H・ジャスタスは，彼を「聖杯探求の騎士」と位置づけ，「『正義』というよりは『自己』が彼にとっての聖杯なのである」と評している[21]。

レイチェルへの求愛と相前後して，ジェレマイアは政治活動にかかわりをもつようになる。1819年の恐慌で農作物の相場が暴落し，ケンタッキー州の農民は大打撃を蒙る。ジェレマイアはそうした農民を救う目的の被差押動産取戻法を支持する救済党に，入党しないもののウィルキーの紹介で近づくようにな

る。彼はフォートに決闘を申し込むことを決意してウィルキーにその立会役を依頼する。しかし，フォートは救済党の有力議員であるゆえ軽率な行動を慎む旨の返事がウィルキーから来る。ジェレマイアはウィルキーの言葉に落胆しながらも，単身でフォートの許に赴き決闘を迫るが，フォートはその翌日に町から姿を消してしまう。時を同じくしてレイチェルの母親が亡くなるが，病床の母を献身的に看護したジェレマイアに心打たれたレイチェルは，ついに彼と結婚する。ジェレマイアは彼女の荒廃した邸宅に移り住むことになり，その農園を回復させようとする必死の努力の結果，「安値のときでさえうまく利益をあげ」，「自分の農園の隅にたちどまってトウモロコシの出来具合をほめる人を見て満足感をおぼえる」（156）ほどに，農夫として成功をおさめるのである。大地を耕す農夫のイメージは，トマス・ジェファスンによって称揚されて以来，共和国アメリカを時間による蚕食から守る，美徳の体現者の象徴となってきたのはいうまでもない(22)。しかし，いやしくも農夫としてかなりの成功を収めたにもかかわらず，すぐに西部の土地投機にジェレマイアが夢を託すようになるのは，美徳の農夫というイメージのはかなさを表している。「ジェレマイアは彼女を連れて逃げ出し，どこか西へ，新たな場，新たな土地，新たな人たち，新たな名前，彼と彼女さえも新たな名前で」（164）と願う。西部での再生の夢という極めてアメリカ的なテーマがここにみられる。だが，この引用の直前で，レイチェルの「茶色のあざが突然，左頬に目立ってきた」ので，「なくなってしまえばいいのだが」（164）とジェレマイアが望んでいる箇所を見落としてはならない。あざに示される人間の不完全さを彼は頑なに拒絶し，「完璧なる行為，この世界の外にあり，純粋で汚されていないもの」（165）を追求することが西部への夢の基盤であると判明するのである。それのみならず，彼は助手や奴隷を従えて，「初めての事業を［土地への］投機に賭けてみようと，密かに土地を捜しまわっていた」（167）こと，あるいは「西へ行けば土地がある。そこでなら金がもうかるのだ」（169）とも語っていることは，大地に密着した価値観である美徳が，いかに商取引というもたれあいや腐敗と表裏一体をなすものであるのかを表す証左にほかならず，ここに共和主義

と資本主義の奇妙な結合が窺われるとも考えることができる。

ケンタッキーの政治情況は，被差押動産取戻法が地方裁判所により違憲と判断されたことにより，にわかに熱を帯びてくる。ジェレマイアと西部の土地投機のため共同していた人物が違憲判決を支持する反救済党側に属していたため，ジェレマイアは救済党員のウィルキーらのすすめで彼と手を切ることにする。というのも，しばらくケンタッキー州を去っていたフォートが戻ってきて反救済党に転じたとの知らせに，ウィルキーらは対抗策として次の州議会議員選挙への立候補をジェレマイアに決意させたからである。結局，彼は落選するが，その直後，フォートの署名入りとされるジェレマイアを中傷する文書を読んだレイチェルは，あまりの精神的打撃で身ごもっていたジェレマイアの子を流産してしまう。その文書の内容は，レイチェルがかつて死産した子の父親は実はフォートではなく，ジョーダン家の黒人奴隷であったという虚偽であった。フォートへの復讐の念を一気に再燃させたジェレマイアの思考の展開を，語り手は次のように解説する。

> 彼は観念をあまりに長く抱いて生きてきたので，それだけが現実のように思われたのだった。この世界は何でもないと思えた。そして世界が何でもないように思えるなら，彼は世界に対して有利な立場で生きているのであり，純粋で完全で抽象的で自己達成的な観念をもっていれば安全だと感じていた。自分は観念によって救済される，いつかは観念が自分の世界を救済すると考えていた。
>
> しかし今や彼は知った，この世界が観念を救済しなければならないのだと。観念が現実性と事実を獲得しなければならない，救済するのではなく，救済されなければならないとわかったのである。(207)

「観念が自分の世界を救う」とは，かつて理想というべきものを無条件に信じそれに従ってきた彼の行動を表す。そうした考えが「この世界が観念を救わなければ」という嘆きに変わったのは，自分の理想に絶対の自信をもち，それが世界という広いコンテクストにおいてどのように機能するのかを具体的に試そうとする彼の自我意識の膨張を物語るものである。ジョン・バートは先の引用

にみられるジェレマイアの理想主義について，彼の「あやまちは，自分の世界に個人的な責任を負うことができ，絶対の正しさという観念的根拠に基づいて行動でき，観念の激しさでこの世界を形づくったり変革したりできると信じていることである」と述べている[23]。幼いジェレマイアに異様な感銘を与えた殉教者像は，ついに具現化されようとしているのである。

フォートの投宿している家に密かに赴いたジェレマイアは，応対に出てきたフォートを「熟したメロンに刃物を突き立てるように」(237) して刺殺する。だが周到なアリバイ工作にもかかわらずほどなくすべては露見し，彼は逮捕される。ジェレマイアの裁判は，新議会派（救済党）と旧議会派（反救済党）の勢力争いに利用され，弁護側と検察側で偽証が横行する。ところが，検察側証人に立ったウィルキーが，復讐としてのフォート殺しの事情を詳細に証言したため，ジェレマイアには有罪評決が下り，絞首刑が宣告される。

殺人教唆で共犯とされたレイチェルと共に投獄されたジェレマイアは，この小説の基礎となる手記を執筆する。「時間を引き離そうとする競争，あるいは敬虔なる予定された場で最後には『時』に出会おうとする突進」(3) と形容される筆致は，もちろん死に物狂いの自己規定の行為であり，この背後には離人症のように現実感覚を喪失した彼の姿がある。「私は出来事を思い出すことはできるが，それらをつなぎあわせた理由は消え去ってしまった。たとえ言葉で説明することができても。・・・私は自分の名前にさえ不思議な感情をおぼえた」(357) という告白がそれである。代理の父ともいえるフォートの殺害が，ウォーレン文学の特徴となっている，父なるものの暗示する過去[24]とそれにまつわる人間の複雑性を抹殺することを意味するゆえにジェレマイアはこうした虚無感に苛まれるのであり，彼のイノセンス追求はここにひとつの頂点に達したということができる。「過去がなければ個人というものはありえない」[25]と力説するウォーレンがジェレマイアを厳しく断罪しているのは当然であり，フロンティアが現実に存在した19世紀初頭のアメリカ社会においてさえも，「世界と歴史はすべて彼の前にあった」[26]ような「アメリカン・アダム」は存在しえないのである。

獄中でふたりは服毒自殺をはかるが失敗し，一度は自分を裏切ったウィルキーとその一味に助けられ脱獄に成功する。ここからのエピソードは史実と異なるフィクションであり，それだけウォーレンの想像力が色濃く滲みでていると考えることができる。オハイオ川，テネシー川をボートに乗って下る逃避行の末，彼らはラ・グラン・ボスという奇怪な老人が支配する，川沿いの沼地にある無法地帯にたどりつく。この男はかつて周辺で海賊まがいの略奪行為を繰り返して富と名を成したのであった。この地に関してジェレマイアの夢の対象であった「西部」であることがしきりに言及された結果，この沼地は「イノセンスの野蛮なパロディー」(27)の役割を担うに至っている。

「アメリカの暗黒の内臓」(418) と表される退廃的なこの沼地で，ジェレマイアは現地の仲間たちと狩りをしたり飲み騒いだりして「過去も未来もない平和」(435) に惑溺する。これは「歴史から人間の価値を入手しようとする責任を回避する」(28)行為であって，西部への夢というアメリカ理想主義の根幹をなす神話を痛烈に批判するウォーレンの姿が明らかである。また，行動を共にしていた同士ワン＝アイ・ジェンキンズから，以前にレイチェルの流産の引き金となった中傷文書の真の執筆者がウィルキーであったことをジェレマイアは知らされる。折から精神状態を悪化させていたレイチェルがナイフで胸を刺して自殺するに及んで，ジェレマイアはフォート殺害に始まる一連の事態がすべてウィルキーの政治的謀略にあやつられた結果であったことにようやく気づいた。そして彼を殺す一念にとりつかれ，ジェレマイアはワン＝アイを縛ってその場に置き去りにして立ち去る。だがウィルキーに助けられたワン＝アイがジェレマイアを見つけ出して殺し，ナイフで頭部を切断してそれを町に持ち帰る。その後のウィルキーは土地投機に成功し，さらに上院議員に当選して活躍中に謎のピストル自殺を遂げる（これは詩的正義の実例であろう）。

理想主義者ジェレマイアはレイチェルという女性をまったく理解できなかったわけだが，それは共和主義の致命的な欠陥を露呈する証拠となっている。リンダ・K・カーバーはJ・G・A・ポコックの理論を援用しつつ，男性的原理の美徳は女性的原理の運命という概念と常に対立していたことを指摘してい

る[29]。共和国は常に時間という変遷，つまり運命に侵食されることを逃れられない。だから美徳によって保護される必要があり，運命が蛇蝎視されるというわけである。レイチェルはフォートとの不幸な恋愛を経験して現実的なヴィジョンをもった存在であることが繰り返し強調されていた。対照的にジェレマイアは初めての性体験の意味を打ち消そうと必死であった。だから，美徳という理想にこだわるあまりに現実を拒否したジェレマイアが運命の象徴のレイチェルを死に至らしめたのは，むしろ当然であったといわなければならない。しかし，歴史の変化のなかに生きるアメリカ人の複雑な運命を追求するウォーレンにとって，成長を拒み自分だけの正義の実現を目指したジェレマイアは，どうしても断罪さるべき人物なのである。

かつてジェレマイアは，「観念が自分の世界を救済する」，そして「この世界が観念を救済する」と考えていた。だが，ラ・グラン・ボスの奇妙な「社会」を経験して，最後に「『自然といううつろなカップ，そこにあるイノセンスのなかだけに一体化を求めた』」（459）のが自分のあやまちであったと彼は告白するに至る。そして，相次ぐ悲惨な死を目のあたりにして，「『しかしそのイノセンスは人間が耐えられるものではなく，人間となることはありえない。だから今，私はイノセンスから逃げて罪へと向かうのだ」（459）と認識を新たにする。それゆえ「あがないを求めた罪は決してなくなることがない。いつもそこにあるのだ。それは許されざるものだ。それは自己の罪，人生の罪だ。罪とは私のことなのだ」（458）と彼は記すのである。ここには「イノセンスの重荷」[30]を自覚したジェレマイアの自己探求の帰結があるわけだが，「『私は苦しみだけを求める。死刑執行人と握手し，最後に彼を我が兄弟と呼ぼう』」（460）とも語るジェレマイアは，自らの破滅の原因となった殉教者の役を，皮肉にも再び引き受けているのである。頭部が切断され，残った胴体はイノシシに食い荒らされて「2，3本の骨」（461）だけになっていたことから判明するように，ジェレマイアの理想と，現実の世界との乖離という深淵はもはや埋めるべくもなく，彼の遅すぎた回心が実ることはついになかったのである。

『世界と時』が執筆されていた1940年代後半，上梓された1950年という時

代は，第二次世界大戦後の新秩序においての覇権獲得をめぐりアメリカと旧ソ連が激しい冷戦を展開し始めたときである。アメリカは共産主義の脅威に対抗して，建国の理念に照らせば望ましからざる資本主義を共和主義に変わるイデオロギーとしてうけいれ，さらにはそれを拡大する方向に進んだのである(31)。しかしその根幹では，「アメリカ人の大いなる『隠れた虚栄や主張』は，自分たちが純粋で美徳に満ちており，近隣諸国は堕落している」という共和主義的信念がこの時期のメンタリティーであったとデイヴィッド・W・ノーブルは解説している(32)。自由主義を世界に拡大することを宣言して冷戦の端緒となった1947年の「トルーマン・ドクトリン」も，この延長線上で解釈できるであろう。

しかし，『世界と時』の主題はどうであったか。19世紀初頭のアメリカ南部においてさえ，美徳に固執した行為がいかに破滅的なものとなるのかを明示するジェレマイアの軌跡は美徳の共和国アメリカの否定となっており，彼の経験は極めてアメリカ的なそれであったということができる。さらに，語り手のペルソナを借りたウォーレンは，ジェレマイア個人の物語が現代アメリカの情況とパラレルになっていることを指摘して，約束の地アメリカを堕落から救おうとする預言である「アメリカのエレミアの嘆き」のレトリックを真っ向から拒絶しているのである。1961年に出版された史論『南北戦争の遺産』で，「完全に社会の外側にいる者の手で社会問題が解決されることはめったにない」こと，さらに「すべての社会問題が抽象的に美徳にコミットすることで解決されるわけでもない」(33)ことを言明しているウォーレンの姿は，既に『世界と時』に歴然としている。

「すべては無に帰したのであろうか？」(465) と読者にむかって開かれた問いかけをすることで語り手は小説を語り終えている。ジェレマイアの生涯は確かに意味のないものであった。しかし，彼の生き様が完膚なきまでに否定されているのは，過去の美徳を現代も信奉するアメリカ人が完全性やイノセンスを追求する「非人間的な怪物」(34)になりかねないというウォーレンの憂慮の吐露であり，『世界と時』は意味深長な警世の書となっているのである。

註

(1) Edgar Allan Poe は "Politian" (1835–36) という未完の詩劇を，William Gilmore Simms は *Confession* (1841)，*Beauchampe* (1842)，*Charlemont* (1856) といった長篇小説を著している。

(2) 実際の「ケンタッキーの悲劇」と *World Enough and Time* との比較については，以下を参照のこと。James H. Justus, "Warren's *World Enough and Time* and Beauchamp's *Confession*," *American Literature* 33 (1962) : 500–11.

(3) Floyd C. Watkins et al., eds. *Talking with Robert Penn Warren* (Athens : U of Georgia P, 1990) 70.

(4) Richard Nelson, *Aesthetic Frontiers : The Machiavellian Tradition and the Southern Imagination* (Jackson : UP of Mississippi, 1990) 221.

(5) Leo Marx, *The Machine in the Garden : Technology and the Pastoral Ideal in America* (New York : Oxford UP, 1964) 141.

(6) David W. Noble, *The End of American History : Democracy, Capitalism, and the Metaphor of Two Worlds in Anglo-American Historical Writing, 1880–1980* (Minneapolis, U of Minnesota P, 1985) 4–6 ; Sacvan Bercovitch, *The American Jeremiad* (Madison : U of Wisconsin, 1978) xi, 160–65.

(7) Watkins et al., eds. 187. Warren は "let the epigraph interpret the book" と述べている。また，Spenser については A. C. Hamilton ed., *The Spenser Encyclopedia* (Toronto : U of Toronto P, 1990) の "justice and equity" の項を参考にした。

(8) Robert Penn Warren, *World Enough and Time : A Romantic Novel* (New York : Random House, 1950) 3. 以下，本文中での引用は括弧を用いてページ数のみを示す。

(9) John Burt, *Robert Penn Warren and American Idealism* (New Haven : Yale UP, 1988) 174 ; James H. Justus, *The Achievement of Robert Penn Warren* (Baton Rouge : Louisiana State UP, 1981) 224.

(10) 大井浩二『アメリカ伝記論』(英潮社，1998) 9.

(11) Watkins et al., eds. 70.

(12) Robert Penn Warren, foreword, *Brother to Dragons : A Tale in Verse and Voices* A New Version (1953, 1979 ; Baton Rouge : Louisiana State UP, 1996) xiii.

(13) Barnett Guttenberg, *Web of Being : The Novels of Robert Penn Warren* (Nashville : Vanderbilt UP, 1975) 57.

(14) 大井浩二『手紙のなかのアメリカ——《新しい共和国》の神話とイデオロギー』(英宝社，1996) 25.

(15) 『フランクリン自伝』と共和国の美徳のかかわりについては，以下を参照のこと。大井浩二『美徳の共和国——自伝と伝記のなかのアメリカ』（開文社出版，1991）11–19.

(16) William Bedford Clark, *The American Vision of Robert Penn Warren*（Lexington : UP of Kentucky, 1991）105.

(17) Burt 174.

(18) 大井浩二『ナサニエル・ホーソン論——アメリカ神話と想像力』増補版（南雲堂，1982）69–90.

(19) 川崎寿彦『英詩再入門』（名古屋大学出版会，1990）157.

(20) 「悲しみを経験しての再生」というモチーフはホーソン的なものである。（大井『ホーソン論』145.）

(21) James H. Justus, "The Mariner and Robert Penn Warren, "*Robert Penn Warren : Critical Perspectives,* ed. Neil Nakadate（Lexington : UP of Kentucky, 1981）132.

(22) Thomas Jefferson, *Notes on the State of Virginia*, *Writings*, ed. Merrill D. Petersen（New York : Library of America, 1984）290.

(23) Burt 178–79.

(24) Justus, *Achievement* 246.

(25) Robert Penn Warren, *Democracy and Poetry*（Cambridge : Harvard UP, 1975）56.

(26) R. W. B. Lewis, *The American Adam : Innocence, Tragedy, and Tradition in the Nineteenth Century*（Chicago : U of Chicago P, 1955）5.

(27) Guttenberg 62.

(28) L. Hugh Moore, Jr., *Robert Penn Warren and History : "The Big Myth We Live"*（The Hague : Muton & Co. N. V., 1970）73.

(29) Linda K. Kerber, *Toward an Intellectual History of Women*（Chapel Hill : U of North Carolina P, 1997）143.

(30) David W. Noble, *Historians against History : The Frontier Thesis and the National Covenant in American Historical Writing since 1830*（Minneapolis : U of Minnesota P, 1965）177.

(31) デイヴィッド・W・ノーブル編著，大井浩二他訳，『アメリカ研究の方法』（山口書店，1993）104–5.

(32) Noble, *The End of American History* 87.

(33) Robert Penn Warren, *The Legacy of the Civil War : Meditations on the Centennial*（New York : Random House, 1961）31.

(34) David W. Noble, *The Eternal Adam and the New World Garden : The Central*

Myth in the American Novel Since 1830 (New York : George Braziller, 1968) 221.

——大学院文学研究科研究員——